過去
からの
メディア論

Seeing current media retrospectively

疑心が暗鬼を生む

大谷卓史（吉備国際大学社会科学部）

情報管理 56(6), 389-392, doi: 10.1241/johokanri.56.389 (<http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.56.389>)

2013年6月28日、いわゆるパソコン遠隔操作事件の被疑者とされる男性の捜査が終結した。被疑者はすべて身に覚えがないと主張しているものの、併せて10件の事件で起訴された^{注1)}。

この事件では、弁護側が、被疑者が真犯人であるとする証拠を開示するよう求めてきたにもかかわらず、検察は捜査中であることを理由に開示しないという異例の事態が続いてきた。パソコンや携帯電話・スマートフォン（スマホ）などの電子データは消去や加工が容易であるから証拠隠滅の恐れがあると検察側が考えるのは当然であろう^{注2)}。しかし、それにしても被疑者を防衛するために必要な証拠を開示しないという状況は、裁判の公正さが保たれるのかという疑いを抱かせる。

7月に入ってから報道を見る限り、検察側が開示しないとしていた「証拠」そのものが存在するのかが疑われるという反論が、弁護側から行われた^{注3)}。弁護側の反論は、現在のところ確かにかなり説得力があるものの、最終的にどのような証拠が提示され、裁判所がどう判断するかはこれからの問題である。

この事件で難しいのは、インターネットが事件の舞台であって、現在のインターネットにおいては、情報の発信者（掲示板での発言者やメールの発信者など）や行為者（インターネット通販サイトでの商品の購入者やオークションサイトでの商品の出品者、電子掲示板の閲覧者など）が誰であるのかを証拠立てる情報が、基本的には、ユーザーIDとパスワード、IPアドレスしかないことである^{注4)}。

今回のパソコン遠隔操作事件では、他人をだまし

てその人のパソコンにマルウェア（悪意あるソフトウェア）を埋め込み、パソコンを遠隔操作して、脅迫を行う電子メールを送信させたり、他人をだまして電子掲示板上の無害と見せかけたハイパーリンクをクリックさせて、そのハイパーリンクに仕込んだ悪意あるコードを実行させて、電子掲示板に意図せぬ犯行予告の書き込みをさせるなどのことが行われた。この結果、電子メールの送信先やサーバー側に残るIPアドレスは、だまされた被害者のパソコンのものだけとなり、このだまされた人びとが被疑者として逮捕され取り調べられ、中には犯してもいない罪を自白してしまい、退学に追い込まれた学生もいた¹⁾。

今回10件の事件について起訴された被疑者の弁護団もこの被疑者も、ほかのだまされた被害者と同様に真犯人によって罪を着せられた者だと主張している。インターネット上に残る証拠（マルウェアを作成した痕跡が被疑者の職場のパソコンに残るとか、真犯人が用意したサーバーへのアクセス記録が残るとか）はこの被疑者を指しているように見えるものの、これらの証拠はだまされた被害者たちのIPアドレスと同様に、確かに何らかの仕掛けで捏造できるものかもしれない。

このような事態を指して、一般的には、インターネットには匿名性があり、違法行為や権利侵害行為を行う心理的・物理的障壁を引き下げると説明されることがある。誰がやったのかわからないならば、責任を追及される可能性が低くなり、犯罪や権利侵害を行っても逃げおおせるかもしれない。

誰がやったのかわからないという状況では、疑心

が暗鬼を生み、普段からあやしい人物と目されている人々がいわれなき罪に問われることが起こりうる。あやしい人物が本当に犯人であることもあるだろうが、実は犯人ではなく、彼／彼女に罪を着せることで真犯人が逃げおおせたり、場合によっては彼／彼女に罪を着せることが目的であるという場合もあるだろう。

歴史上、もっとも有名な匿名性による疑心暗鬼が荒れ狂った事件として詳細な記録が残るものが、「ルーダンの憑依事件」であろう²⁾。

1630年代、パリから270キロ南西の町ルーダンの女子修道院を舞台にして、集団悪魔憑き事件が起きた。この事件は、イエジー・カヴァレロヴィッチの『尼僧ヨアンナ』やケン・ラッセルの『肉体の悪魔』などの映画でも描かれたが、当時の権力者であるリシュリュー枢機卿やルイ13世などの高位の政治権力者までも巻き込み、大きな注目を集める事件となった。この事件は、匿名パンフレットや匿名の初期新聞によって翻弄され、増幅されたように見える。

1632年9月、ルーダンのウルスラ修道会の修道女たちが悪魔憑きの症状を示し、この憑依現象を引き起こした魔法使いとして、この町のサン・ピエール・デュ・マルシュ教会の主任司祭ユルバン・グランディエが告発された。彼は、身なりがよく大柄で男性的魅力にあふれ、巧みな弁舌で多くの信徒を引き付けていた。しかし、その一方で、町の有力者の子女たちを誘惑し、子どもまで産ませるなどの不品行や、敵対者に対する尊大で傲慢な態度によって、放縦でうぬぼれが強いという評判もあった。何度も地域政治の謀略に巻き込まれながらも、その狡知によって切り抜けてきた³⁾。

しかし、今回は、彼の分が悪かった。当時フランスの最高権力者であったリシュリュー枢機卿やルイ13世、その取り巻きたちに、彼はある嫌疑で目をつけられていたからである。

1627年に、ルーダン出身の貧しい少女が皇太后マリー・ド・メディシスの側女に取り立てられたものの、

王やリシュリュー枢機卿を非難する匿名政治パンフレット事件に巻き込まれ、失脚した。その後、今度は王を持ち上げ、周囲の取り巻きを「悪しき助言者」と誹謗する匿名パンフレットが現れた。この匿名パンフレットの作者が、グランディエではないかと疑われていたのである。ルーダンのカプチン会士が政敵のグランディエを陥れるため、匿名パンフレットの作者が彼であると訴えたという噂もあった³⁾。

「噂の増殖。こうしたすべての告発『物語』は、都市を霧で包む。何が真で、何が偽か？ 確実性と判断材料の消失に苦しむルーダンの住民は、安全を求めて反射的行動を起こす。真実がどこにあるか見通せないで、とにかく一つの真実をでっち上げねばならない—だが真実は、誰にとっても同一と言うわけではない」⁴⁾。

魔法使いとして告発されたグランディエは、激しい拷問を伴う取り調べの中、自らの不品行と「生来の弱さ」を告白したものの、魔法使いの疑いも匿名パンフレットの作者であるという疑いも否定した。魔法使いの証拠である痛覚のない場所が肩と性器に発見されたなどの理由で、結局彼は火刑に処せられる⁵⁾。

グランディエは火刑台にかけられても罪を告白することなく、神への信仰と自らを迫害した者たちを許すという発言を残して死んだと、ルーダン出身で、ミラの変光周期の計測などで知られる博学の図書館員イスマエル・ブイヨーは、著名な機械論者ピエール・ガッサンディへの手紙に書いている。また、グランディエを死に追いやった聖職者や外科医、民事代官たちは精神錯乱や狂死を遂げたとされ、彼自身は死後聖人としてあがめられるようになった⁶⁾。

結局悪魔憑きがあったかどうかとも疑わしい。自分に悪魔を憑依させたとしてグランディエを告発した修道院長のジャンヌ・デ・ザンジュは、その後聖女とあがめられ、リシュリュー枢機卿と一夜夕食をとるまでにフランス国内での名声を高めた。ところが、彼女と永く接して悪魔祓いを続けた聖職者

シュラン神父は、深く付き合えば付き合うほど彼女の徳性と発言に疑いを深めていったようだ⁷⁾。

ジャンヌ・デ・ザンジュは貴族の娘に生まれながら、幼いころの怪我がもとで体がやや不自由になり、「娘を覆い隠そう」と決意した母親の気まぐれのような判断で修道院に押し込められた⁸⁾。彼女の不幸な生い立ちやシュラン神父とのやり取りを見ると、ジャンヌはむしろグランディエに恋していたのであって、成就しない恋や人生への絶望が、嫉妬と鬱屈した復讐心から快活で目立った彼を告発させるに至ったかのようにも見える。

匿名のパンフレットに端を発し、匿名の告発や噂に包囲されてグランディエは火刑に処せられた。インターネットでの行為が匿名性を高めている現代に

おいても、悪目立ちする誰かを陥れるため、匿名性が利用されるかもしれない。FacebookなどのSNSでの匿名リクエスト送信者がコミュニティの外れ者であるなどの疑いをかけて政治的につぶすなどの謀略があってもおかしくない。

匿名性によって疑心が生まれ、疑心が暗鬼を生むという構図は、私たちの認知や感情の限界を示しているのかもしれない。疑心が生んだ暗鬼によって人を裁くことは危険であるし、誰かを排除し罰しようという誘惑も恐ろしい。裁判においては推定無罪の原則が重要であり、日常生活においては噂の根拠のなさを見通し、信頼と善意という原則を優先させるなどの知恵と倫理的原則が重要なように思われる。

本文の注

- 注1) 「PC遠隔操作, 10件起訴 片山容疑者の捜査終結」『朝日新聞』2013年6月29日朝刊p 39.
- 注2) 江川紹子「【PC遠隔操作事件】第1回公判前整理手続きで、弁護人の怒り炸裂」『Yahoo!ニュース』2013年5月22日<<http://bylines.news.yahoo.co.jp/egawashoko/20130522-00025135/>> (最終アクセス日: 2013年7月15日).
- 注3) 日本報道検証機構「遠隔操作「携帯から猫写真復元」も誤報の可能性」『GoHoo』2013年7月14日<<http://gohoo.org/alerts/130713/>> (最終アクセス日: 2013年7月15日), 日本報道検証機構「遠隔操作 首輪つけた瞬間画像「存在疑わしい」」『GoHoo』2013年7月11日<<http://gohoo.org/alerts/130220/>> (最終アクセス日: 2013年7月15日), 江川紹子「【PC遠隔操作事件】報じられてきた「決定的証拠」はなかった」『Yahoo!ニュース』2013年7月11日<<http://bylines.news.yahoo.co.jp/egawashoko/20130711-00026343/>> (最終アクセス日: 2013年7月15日).
- 注4) 一定時間ごとに認証に用いるパスワード(数字の並び)を発生させて、通常のコピー IDとパスワードともにユーザー認証に利用する「ワンタイムパスワード」や正規のユーザーの指紋などの、変わりにくく、ほかの人間と混同される可能性が低い身体的特徴を用いる「バイオメトリクス認証」などのしくみが利用されることがある。

参考文献

- 1) 大谷卓史. IPアドレスの「精度」. 月刊みすず (no. 610). 2012年11月号, p. 2-3.
- 2) ミシェル・ド・セルトー. ルーダンの憑依. 矢橋透訳. みすず書房, 2008, p. 22-85. 原著 Michel de Certeau. La possession de Loudun. Julliard, 1970
- 3) ミシェル・ド・セルトー. ルーダンの憑依. 矢橋透訳. みすず書房, 2008, p. 22-103, p. 106-124. 原著 Michel de Certeau. La possession de Loudun. Julliard, 1970.

- 4) ミシェル・ド・セルトー . ルーダンの憑依. 矢橋透訳. みすず書房, 2008, p. 115. 原著 Michel de Certeau. La possession de Loudun. Julliard, 1970.
- 5) ミシェル・ド・セルトー . ルーダンの憑依. 矢橋透訳. みすず書房, 2008, p. 246-271. 原著 Michel de Certeau. La possession de Loudun. Julliard, 1970.
- 6) ミシェル・ド・セルトー . ルーダンの憑依. 矢橋透訳. みすず書房, 2008, p. 290-315. 原著 Michel de Certeau. La possession de Loudun. Julliard, 1970.
- 7) ミシェル・ド・セルトー . ルーダンの憑依. 矢橋透訳. みすず書房, 2008, p. 318-338, p. 340-359. 原著 Michel de Certeau. La possession de Loudun. Julliard, 1970.
- 8) ミシェル・ド・セルトー . ルーダンの憑依. 矢橋透訳. みすず書房, 2008, p. 352-356. 原著 Michel de Certeau. La possession de Loudun. Julliard, 1970.